「日々の理科」（第 3152 号）　2023,-3,24

「最後の春みつけ（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

３月下旬の東京での自然観察で、まず子どもたちが盛んに集めるのは、もちろんタンポポである。

本学構内の黄色いタンポポは、なぜか在来種のカントウタンポポが優勢で、セイヨウタンポポはほとんど見かけない。本学は、周囲をビル群に囲まれた緑地帯なので、外来種の侵襲をある程度免れた可能性もある。

低学年（１・２年生）の子どもたちが「春みつけ」に出かける「新イタドリ広場」は、武蔵野台地（舌状台地）と、音羽低地（神田川の支流によって形成された浸食谷）の段丘崖の上にある。斜面は、子どもはもちろん、大人でも入れないほどの急斜面なので、段丘崖本来の自然環境が見られ、いわゆる風致された土地の一つになっている。今の時期、この段丘崖には、白い花がたくさん見られる。

この白い花は、すべて「シロバナタンポポ」である。関東以西に多い種類で、「カンサイタンポポ」と呼ばれることもあるが、別種であり誤りである。

舌状花はカントウタンポポやセイヨウタンポポよりも少なく、花全体も小ぶりである。

この花も子どもたちに人気があり、黄色のタンポポと白いタンポポの「花束」を作る子どもが多かった。全部とってしまうと、種子が拡散しなくなるので、少し採り残すように話しておいた。